

平城京右京八条一坊十一・十二坪

発掘調査概要報告書

1989.3.

大和郡山市教育委員会

序 文

現在、大和郡山市が進めている北部清掃センター周辺整備事業の予定地は、平城京の右京八条一坊の十～十四坪を占めており、その地下には奈良時代の遺構が数多く眠っています。このため当市では昭和59年度から周辺整備に先立って事前調査を進めてまいりました。その結果、この辺に京の官営工場があつたことなどがわかり、大きな学術的成果を得つつあります。

調査地は、十一坪と十二坪の二坪にまたがり奈良時代の掘立柱建物・渠・溝・井戸・道路などが検出されました。今後、整理作業を進め報告書を刊行する予定ですが、とりあえずここに連報としての概要報告書を提出し、皆様方に調査成果の一端をお知らせしたいと思います。

最後になりましたが、調査期間中、数多くの関係機関・関係者から御指導を得ることができましたことに深く深甚の意を表し、併せて本書についての御批判をお寄せ下さるようお願い申し上げます。

平成元年3月31日

大和郡山市教育委員会

教育長 井 上 三 夫

例　　言

1. 本書は大和郡山市九条町100番地他において実施した平城京右京八条一坊十一・十二坪発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、昭和58年度から継続している北部清掃センター周辺整備事業に伴う事前調査として実施した。調査期間は、1988.5.10～8.4、調査面積は約610m²である。
3. 調査は、大和郡市教育委員会社会教育課（課長松村達志）が実施し、技師服部伊久男・山川均が現地を担当した。また、調査に伴う事務一般は、北部清掃センター周辺整備工事事務所（所長梶井貞男）が担当した。
4. 調査・整理には、下記の作業員・補助員が参加した。（敬称略）
（作業員）杉山典三・堀川正治・田中克己・埼山庄勝・中川憲・辻本義夫・岸田勝信・西川信義・増田高雄
（補助員）荻田智恵美・秋山幸枝・加藤洋子・竹内直子・網島和久
また、現地では下記の方々から御教示を得ることができた。記して感謝いたします。
(敬称略)
千田剛道・杉山洋（奈良国立文化財研究所）、楠元哲夫・西藤清秀・竹田政敬（樞原考古学研究所）
5. 本書の執筆・編集は服部が担当した。

本　文　目　次

I.はじめに.....	1
II.遺構と遺物.....	5
III.まとめ.....	20

I. はじめに

契機と経過

近年の人口増加と消費生活の拡大に伴って、連日はき出される不要物（ゴミ）の量は、増加の一途をたどっており、各自治体がこのゴミの処理に日夜苦慮しているのである。当市も例外ではなく、ゴミをすみやかに処理するための施設の建設が切望されていた。このため市当局では、奈良市との境に近い市域の北端部に新しい焼却場を建設し、またその周辺に温水プールやテニスコートなどを造るという大規模な事業を策定したのである。この事業地は、約2.3haに及ぶ面積を占め、その上全域が遺跡（平城京）にかかるものであった。当然のことながら事前の調査が必要であり、昭和58年の清掃センター建設地の調査を皮切りに継続的に調査を進めてきたのである。そして、今回の調査で一連の事前調査は終了することになった。調査は昭和63年5月10日から開始し、同8月4日に終了した。調査面積は約610m²である。調査地の地目は水田であり、周辺には高さ3mの盛土がなされ、ことあろうに奈良シルクロード博覧会の特設駐車場と利用されていた。当初約420m²の調査区を設定し、十一坪と十二坪を隔てる坪境小路の検出を企図した。途中、190m²の拡張区を設け、合計610m²の調査に至った。土層の堆積状況や遺構の残存状態は、西接する十三・十四坪の場合とほとんど同じ状況にあった。調査区の大部分は十二坪に相当し、また十二坪の中でもその北西の隅に当る部分であるため、遺構の数はそれほど多くないと予想していたが、意に反して多くの遺構が検出された。検出遺構は、坪境小路・同側溝・掘立柱塀・掘立柱建物・井戸等である。坪の隅部であるため十二坪の性格を十分把握できたかどうか問題は残るが、十三・十四坪で明らかにされた官営工場としての性格を示す遺物も若干ではあるが出土しており今後の検討課題となった。



fig. 1 調査地

（地理調査所二万五千分一地形図「郡山」大正11年測図、昭和30年資料修正 使用）

調査日誌抄

1988. 5. 10 (火) バックホーによる掘削を開始する。表土下約1.0mで灰色の中世包含層を検出。
5. 14 (土) 国土座標の振り込み、地区割の設定、包含層の掘下作業を始める。
5. 23 (月) 遺構検出・遺構の掘り下げ開始、坪境小路を検出。
6. 16 (木) 拡張区設定、重機による掘削を行う。
6. 22 (水) 炭化粒の充满した土坑を検出、銀冶関連遺物はない。
6. 23 (木) 宅地割溝検出、多量の土器が廃棄されている。
7. 8 (金) 空中写真撮影及細部地下写真撮影
7. 11 (月) 遺構平面実測 ($S = 1/20$) 開始
7. 22 (金) 井戸 S E -01実測、柱穴・土坑等の断割り
7. 30 (土) 器材搬出
8. 3 (水) 埋戻し開始
8. 4 (木) 全工程終了

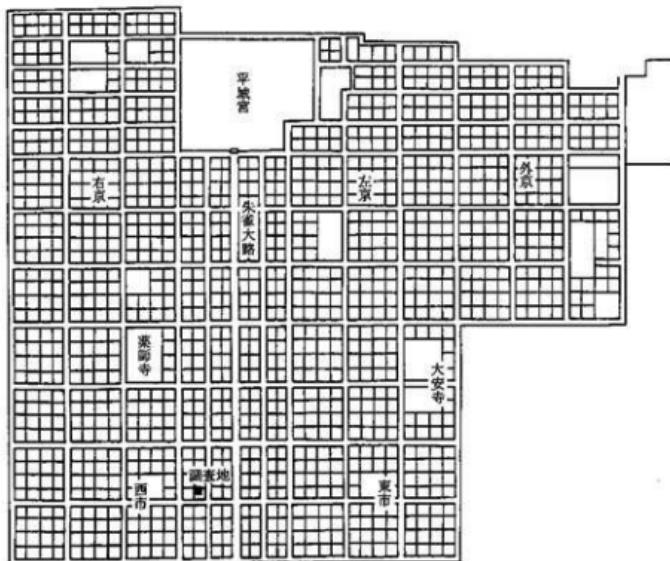


fig. 2 条坊と調査地点



fig. 3 平城京条坊復原図と調査地点（奈良市「平城京条坊復元図」昭和56年9月編纂 使用）

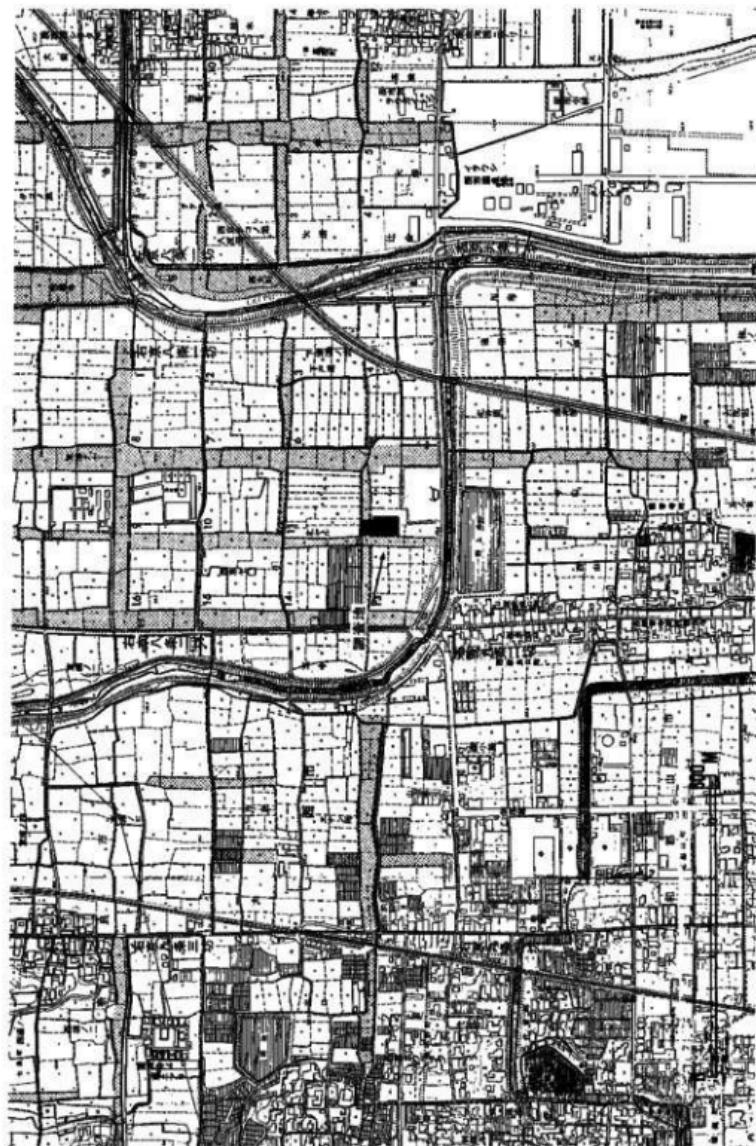


fig. 4 國境地帶の遺存地圖と小字名
(奈良県立橿原考古学研究所「大和國全圖復元図」No.26使用 一部加筆)

II. 造構と遺物

基本的な層序は、①表土、②灰白色砂質土層、③茶色砂質土層、④灰色砂質土層、⑤淡茶褐色粗砂層、⑥青灰色砂質土層、⑦青灰色粘土層、⑧灰色砂質粘土層、⑨淡灰色砂質粘土層、⑩地山である。⑥～⑦層は、秋篠川の氾濫による砂層堆積と滌水による粘土層の堆積であり、隣接する十三・十四坪、あるいは西一坊大路の調査地点でも認められたものである。近世を中心とした時期の堆積と思われる。第⑩層は中世包含層である。瓦器碗・土器皿・羽釜・青磁等の小片が少量含まれる程度であるが、奈良時代の土器・瓦片が多量に含まれている。第⑨層は第⑩層と区別がつけにくく層である。いわゆる中世素掘溝と呼ばれる小溝が第⑨層上面より掘り込まれているので、一応奈良～平安時代ごろの包含層と考えておきたい。この⑨・⑩層も隣接する調査地点とは同じ状況で存在する。造構はすべて地山面上で検出している。検出造構面の標高は52.6～52.7mで、現地表面より約1.2～1.3m下である。

検出した造構はすべて奈良時代に属するものである。主要な造構には、道路1条、溝3条、掘立柱建物14棟、掘立柱塀12条（建物の可能性あるものを含む）、土坑3基、井戸1基などである。

道路SF01 十一坪と十二坪を隔てる東西方向の坪境小路であり、延長約5m分を検出した。南北両側溝を有し、路面幅は1.75～2.25m、東へいくほど若干幅が広くなる。舗装の痕跡は認められず、路面は地山面で検出している。路面上では、土坑1基、溝2条を検出している。

溝SD01 SF01の北側溝で、最低2時期にわたることが土層断面の観察によって知られる。古い時期の溝SD01Aでは、SF01に接して幅約1.3m、深さ約0.6mの溝が設営されているが、溝の北半分の様相は不明である。後述するSD02（南側溝）のように北半分が一段高く掘り込まれて十一坪に続いていることも考えられる。新しい時期（SD01B）では、SD01Aを切って造作される。これは、幅約3.7m最深部で約0.6mを測る規模である。この時期には、南半分が一段高くなる二段掘りの形態をもって続いているようである。

溝SD02 SF01の南側溝、幅約3.2m、最深部で約0.5mを測る。SF01からやるやかに傾斜し、十二坪に接するところで深くなる。SD01Aもこうした形状を呈するのではないかと思われる。

溝SD03 調査区の南半部で検出した浅い溝である。幅は1.3～1.9m、最深部で約0.15mを測る。南肩部は直線的であるが、北肩部は井戸SE01の南西辺から北側へ約0.9m、幅約6mにわたって突出する。井戸を避けるように計画的に造作されているらしい。井戸の南側に当る部分には多量の土器が廃棄されていた。

建物SB01 枠行4間、梁行3間の東廂付南北棟建物、廂の出は約2.4mを測る。

建物SB02 枠行5間、梁行2間の南北棟建物。南から3番目の柱筋に間仕切りの柱を設ける。柱の重複関係からSB03より新しいことがわかる。

建物SB03 枠行3間、梁行2間の南北棟建物。

建物SB04 枠行2間、梁行2間の小形建物。南妻柱は検出されなかった。重複関係からSB01

より古いことがわかる。

建物SB05 构行3間、梁行2間以上の東西棟建物。

建物SB06 构行6間、梁行2間以上の南北棟建物。西侧柱筋が排水溝でも検出されていないので、梁行は確実に2間以上である。

建物SB07 构行4間、梁行2間以上の南北棟建物。

建物SB08 梁行2間の東西棟建物。西妻柱列の検出にとどまった。

建物SB09 3間×1間以上の建物。棟の方向は明らかではない。

建物SB10 3間×1間以上の建物。柱方向も明らかでない。

建物SB11 調査区の南西隅で検出された規模等不明の建物。

建物SB12 西妻柱列のみ検出、東西棟建物であろう。

建物SB13 构行3間以上、梁行2間の南北棟建物。

建物SB14 建物の南西隅柱と東へ2番目の柱穴を検出したにとどまった。

塙SA01 7間の南北塙、柱間は不揃いで、柱掘方も小さい。

塙SA02 3間の南北塙

塙SA03 6間の南北塙、柱間は不揃いで柱掘形も小さい。掘方内には炭、灰が目立つ。

塙SA04 3間の南北塙、柱間は不揃いで国土座標軸に対して北で西に大きく振れる。建物SB04より新しい。

塙SA05 東西塙、4間(以上)。柱間は不揃いである。

塙SA06 東西塙、3間分を検出。内、柱穴1基は井戸SE01によって破壊されていると思われる。SA03より古い。

塙SA07 2間分の東西塙

塙SA08 2間の東西塙、建物の北側柱列の可能性もある。

塙SA09 2間分を検出、建物の東北隅部の可能性が残る。

塙SA10 3間分を検出、建物になる可能性が高い。

塙SA11 溝SD01にそって設けられた東西塙で、3間分を検出した。内、柱穴1基は排水溝内で検出している。

塙SA12 3間分を検出、西側へ展開する建物と思われる。

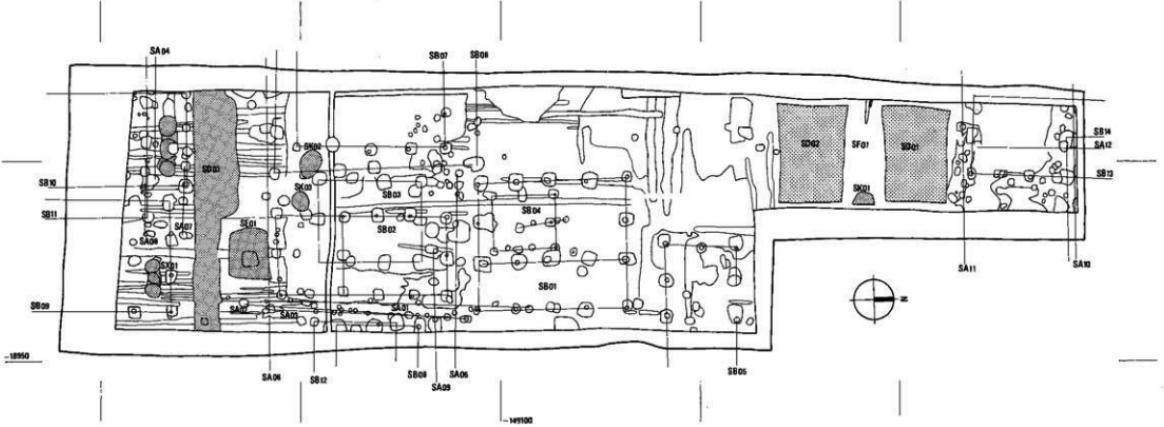


fig. 5 金庫区平面図 (S = 1 / 200)



fig. 6 航空写真（真上から、
上が北）



fig. 7
航空写真（西
上空から）

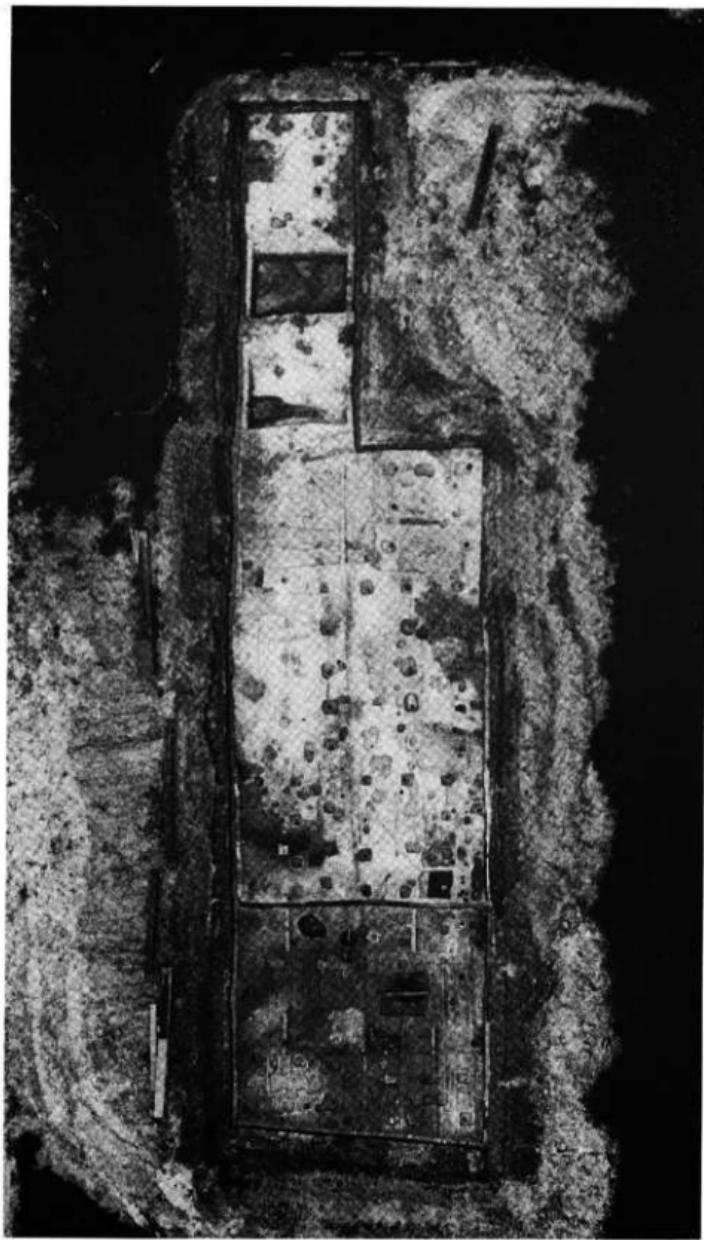


fig. 8 全景航空写真（上が北）

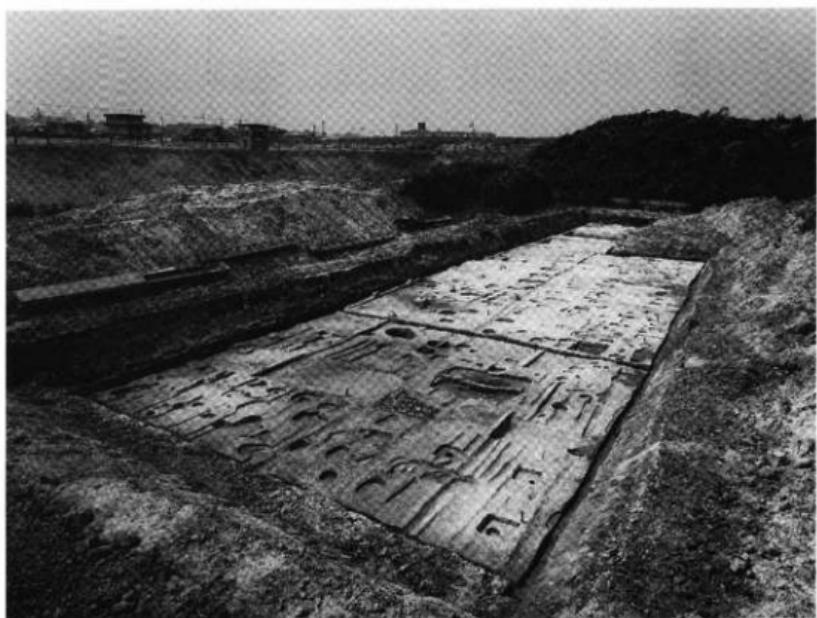


fig.9 全景（南東から）



fig.10 全景（北東から）

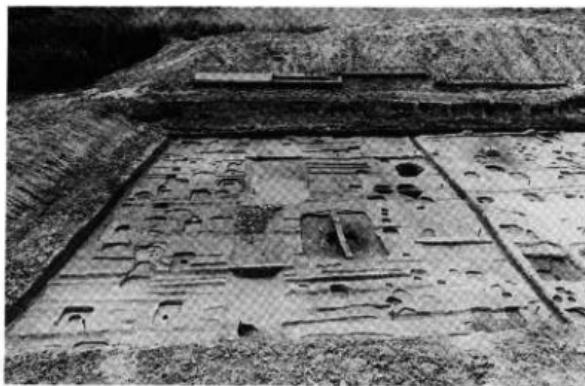


fig.11 細景（東から）



fig.12 細景（東から）



fig.13 建物SB01
(東から)



fig.14 細景
(北西から)

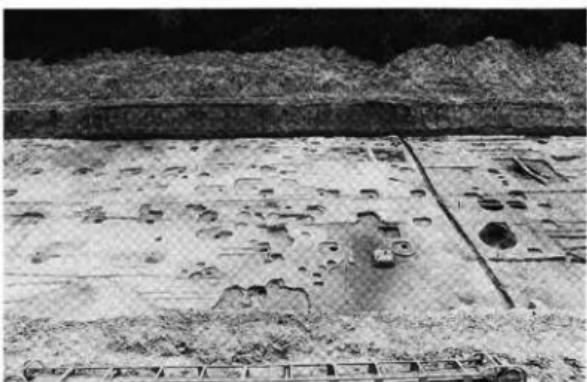


fig.15 細景 (西から)



fig.16 細景 (西から)



fig.17 建物SB05
全景（東から）



fig.18 南側溝SD02
全景（東から）



fig.19 北側溝SD01
全景（東から）



fig.20 十一坪全景
(北から)



fig.21 調査風景

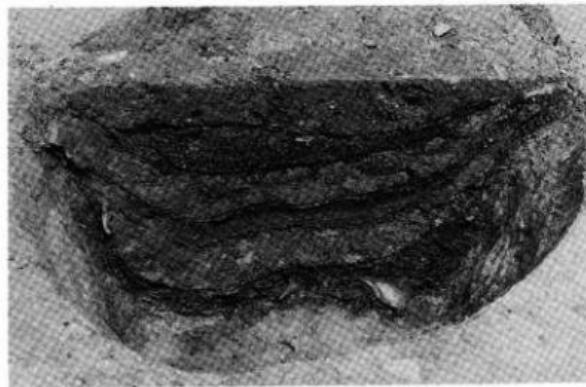


fig.22 土坑SK02土層
断面（西から）

土坑SK01 道路S F01の路面上で検出した不整形な土坑。深さは約0.2mで、淡青灰色砂層・淡茶色細砂層・黒灰色灰・炭粒層が堆積する。上部2層は流入土であり、灰炭層は厚さ約5cmほどである。坑底が火を受けた痕跡は認められなかった。

土坑SK02 径約1m、深さ約0.5mの円形土坑。灰色土層・黒灰色炭灰層・灰青色土層・黒灰色炭層・暗灰褐土層・黒灰色灰層が堆積する。3枚の炭灰層が間層をはさみながら互層を成す状況である。

土坑SK03 径約0.8m、深さ約0.4mの円形土坑。暗灰色土層・暗灰黄色土層・黑色灰層・灰黄色粘土層が堆積する。

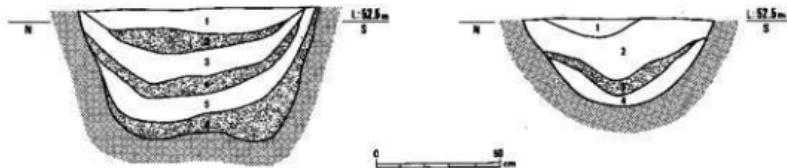


fig23 土坑SK02・SK03土層断面図

S K02	S K03
1. 灰色土層	1. 暗灰色土層
2. 黒灰色炭灰層	2. 暗灰黄色土層
3. 黒灰色炭灰層	3. 黒色灰層
4. 黒灰色炭灰層	4. 灰黄色粘土層
5. 暗灰褐土層	
6. 黒灰色灰層	

井戸SE01 東西2.4m、南北2.0m、深さ2.6mの方形の掘方をもつ井戸。西辺の掘方下部では一段のテラス面をもち、二段掘りの様相をなす。当初の井戸枠は、横板井籠組であり、後に上半部に縱板組の方形井戸枠を捕う。横板組井戸枠は、内法で一辺約0.6mである。各面とも五段分が遺存する。横板は、材の両端を凹形に造り出したものを組み合わせている。上段ほど横板の縦幅が狭くなる。横板の厚さは5cmほどである。次に縦板を後補する。各辺とも6枚前後の重複が認められた。縦板内には横桟を組む。下段の横桟は方柱材を用い、上段の横桟には加工の荒い丸太材を用いる。

井戸から出土した遺物の中で特に目立ったものを図示する (fig27)。いずれも井戸底からまとまって出土したものである。

1は壺Nで、口縁部を欠損する。底径13cm、体部最大径24.5cm、頸部径6.5cm、体部高28.5cmを測る。肩部には双耳が貼付される。全体に回転ナデが施され、体部上半には灰白色の自然釉が付着する。暗灰色を呈し、焼成は良好。2は壺K、口縁部を欠失する。頸径6cm、体部径16.5cm、底径



fig.24 井戸SE01
全景（西から）



fig.25 井戸SE01細景
(東から)

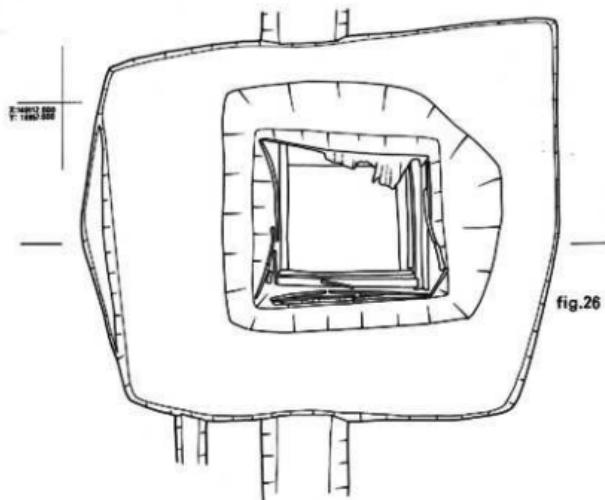
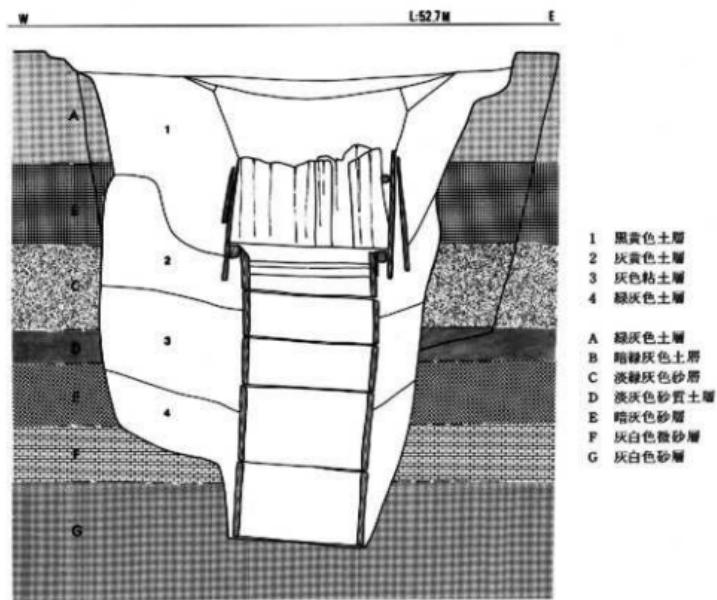


fig.26 井戸SE01実測図
(S = 1 : 60)



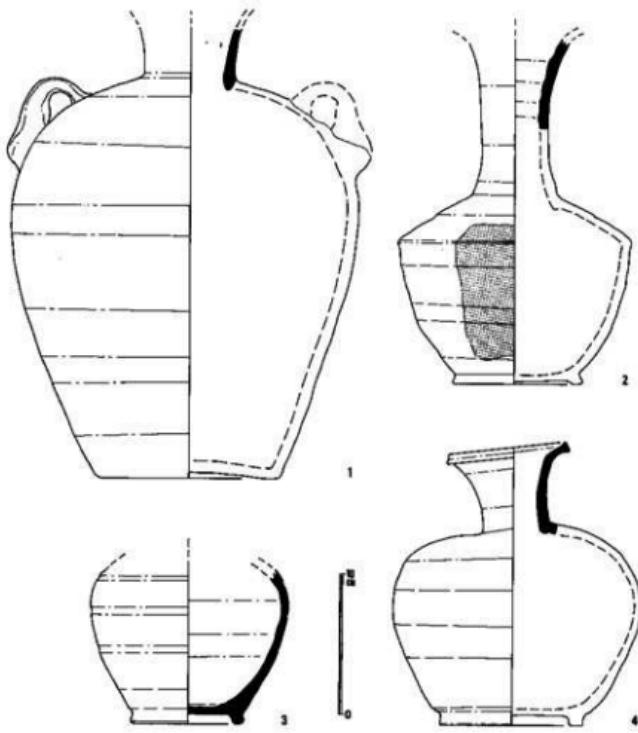


fig.27 井戸SE01出土土器

9.2cmを測る。体部下半に回転ヘラケズリ、その他の部位は回転ナデ調整が施される。全体に焼成が甘く、体部の一部にはススが付着する。高台は低い。暗青灰色を呈する。4は壺し、口縁部の一部を欠損する。復元口径8.5cm、頸径5.0cm、体部最大径17.5cm、底径10.2cm、器高20.1cmを測る。焼成は良好、暗灰色を呈する。3も壺しであるが、4に較べ少し小形である。体部上半～口縁部を欠失、底径8.1cm、体部最大径14.0cmを測る。焼成良好、暗灰色を呈する。

土器埋納遺構SX01 調査区の東南部で検出、径約65cm、深さ約18cmのピット内に土師器甕、須恵器壺が口縁部の向きを逆にして横置されていた。X線撮影の結果、内容物は検出されていない。性格はよくわからないが、同じようなピットが2基、さらに東側へ連っているのが留意される。東の2基のピットには土器埋置の状況はなかったが、一連のものとして把えることもできるかもしれない。そこで、ここでは三連式ピットと仮称しておきたい。さて、同じような三連式ピットが、そ

の西側でも検出されている。ここでは土器等が置かれた状況はまったく認められなかった。次に、この二つの三連式ピットの位置をみると、東側のものはSB09の内部に、また西側のものはSB10の内部に当り、各々同じような位置を占めていることがわかる。ただ建物と同時期かどうかの検討を経なければならず、あるいは建物内部の何らかの施設に関連する可能性を指摘するにとどめたい。

出土土器をfig.31に示す。1は須恵器壺K、口径7.5cm、体部径12.9cm、底径5.7cm、器高20.0cmを測る。口縁端部は外傾する面をなし、体部下半にヘラケズリ、他は回転ナデを施す。頸部に緑灰色の自然釉が付着する、灰白色を呈する。口縁部の一部を欠失している。2は、小形の甕Aで口径14.2cm、頸径11.9cm、体部径15.3cm、器高14.0cmを測る。口縁部はよこなで、体部は細密なハケ目調整を施す。内面には炭化物の付着が認められる。赤褐色を呈し、焼成は良好、完形品と考えてよい。

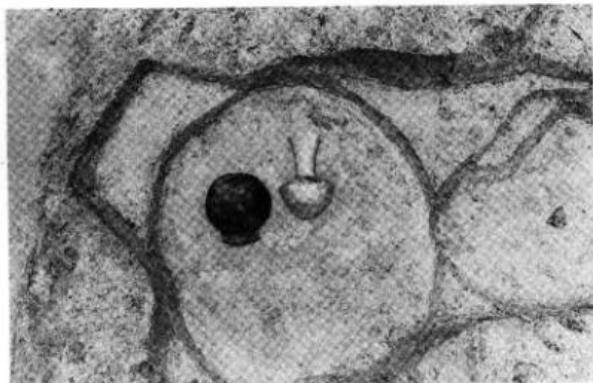


fig.28 土器埋納遺構
(南から)

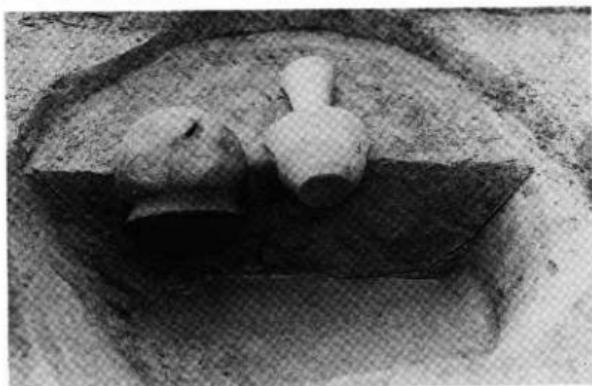


fig.29 土器埋納遺構
(南から)

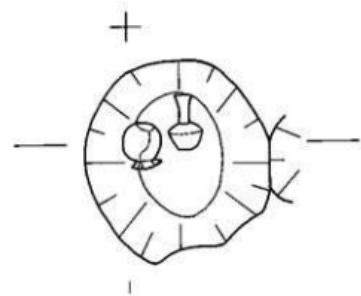


fig.30 土器埋納遺構 ($S = 1 : 20$)

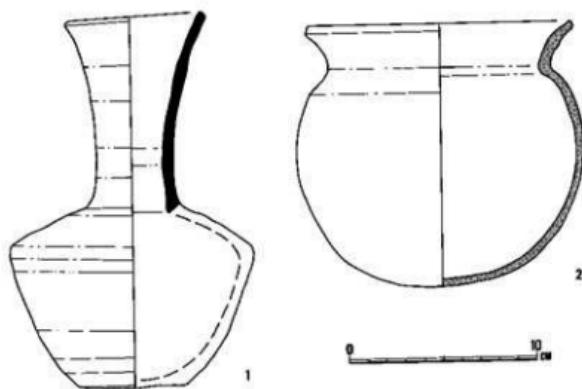
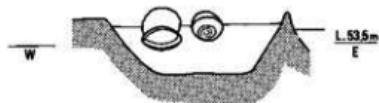


fig.31 土器埋納遺構出土土器

III. まとめ

今回の調査地は、十二坪の北西隅部に当っているため遺構の密度は薄いものと考えていたが、意に反して多数の遺構が検出された。一方、遺物の面でも特にきわだったものはないが、今後潤沢な整理費に恵まれ詳細な整理作業を行っていく過程で十二坪の性格を考えるうえで重要な手がかりが得られることであろう。とりわけ、隣接する十一・十三・十四坪の調査所見から右京八条一坊の南部には漆器、金銀器工房が振興する官営工場地たる性格付けがなされている今日、この地域にあって明確な性格付けがなされていないのは今回の十二坪のみであり、この点の解明こそ今後の課題といえるものである。

大和郡山市文化財調査概要13

「平城京右京八条一坊十一・十二坪
発掘調査概要報告書」

平成元年3月25日 印刷

平成元年3月31日 発行

編集 大和郡山市教育委員会
発行 大和郡山市北郡山町248-4

印刷 明新印刷株式会社
奈良市橿本町36
